

町長

ひとりごと

(89)

斉藤

譲



図書館が、いよいよ完成の域に近づいてきた。

「公園の中の図書館」を基本理念として建設をすすめてきたが、すでに周囲には沢山の樹木が植えられ、いまマロニエが赤や白い花を咲かせている。そこに聳える石張りの図書館は、辺りの青葉に映えてとても美しい。「光文化の森公園」という名称がびたりするような雰囲気、すでに漂いはじめている。これが完成をし、やがて二十年、三十年の歳月を刻んだとき、この植えたばかりの樹木も大きく枝を張り、森と呼ぶにふさわしい深みのある公園になっているに違いない。そこに集う人々は、緑の葉陰で憩い、語らい、あるいは散策をし、図書館で心静かに読書をする一時を過ごすこ

とになるのである。たとえその時代が苦難の時であろうと、必ずやこの公園は、訪れる人々に生きる喜びや希望を与え、生活のリズムを弾ませてくれる貴重な町民の財産になっていることを私は信じて疑わない。

▼私は暇をみつけてはよく工事現場に足を運ぶ。自分なりに気を入れてきた事業であるから、常に気にかかりもし、また毎日に進む現場の様子や、そこで働く人達の姿をみるのが好きで、楽しい気分転換にもなるからである。私が行くとき必ずといってよいほど現場監督が目敏く私をみつければ現場を案内したり、工事の進捗状況を説明してくれたりする。この人は畔蒜工務店の熱田誠さんである。東陽病院の建築も担当し、ペタランの建築現場監督であり、その手腕力量には定評のあ

るところである。その彼は、ふだんは寡黙であるが、時々まぎろりと向ける眼には、なかなか迫力がある。現場監督としては申し分のないいい男の面構えをして

いる。現場では厳しい監督という評判もたっている

勝負真剣



なるほど素人の私がみても、現場はいつも無駄なく動き、常に緊張感が張りつめているのを感じる。設計者も、彼は差配が的確で、一度言い出したならなかなか後に引かないし、しっかりした信念をもった素晴らしい監督だと褒める。

▼工事の施行にあたっては、

設計図に基づいて施行図を起し、工程表をつくって下職を決め、限られた期限の中で各職人を組み合わせて、計画にそってこれを動かしていくのである。この歯車が狂えば、たちまち時間や費用にロスを生ずることになるのであるから、現場監督は常に真剣勝負の気構えを欠かせない責任の重い仕事だ。だからこそ厳しくな

ぐにその結果がでる。まさに彼にとって現場は、言い訳の許されない戦場だと思

う。それにしても、机上で書かれた一枚の設計図から、一つの建築物が出来上ってゆく様子をみていると、改めて競争社会の中で磨きあげられた民間の技術力や管理能力の凄さを思い知らされる。いま熱田さんのような立場の人々が、日本中の、いや世界中の工事現場や企業の現場で一線を支え、そしてその傘下には資材をつくり、原料を生産する大きな裾野が広がって社会を構成しているのである。この人々は、優勝劣敗の世界、競争の波上に身を浮かべて生きているのである。

▼彼の背中を見るにつけ、私はいつも、果して自分が身を置く行政は、一体これでよいのだろうか。また政治はこれでよいのだろうか。設計図には、経営図面と現場図面がある。もしも経営図面を引き間違えれば、倒産の危険を呼び、現場図面を間違ったり、施行を誤れば、現場は完成しないのである。

だから真剣勝負が常在の世界だ。

一方、国政はいま、日本がこれから進むべき方向を示す設計図を、本気になって描こうとする努力をしているのであろうか。私にはとてもそうは思えない。憂国という言葉があるが、いまの政治家諸氏の言動をみる限り、この言葉は死語になりつつある感を深くする。誠に遺憾だ。翻って自分自身も、町づくりの設計図はこれでよいのか、現場はだいたいようぶかと自問し反省もする。行政効果は測定し難いといふ人は言う。それは行政にたずさわる者の身勝手な言い訳にすぎない。いま行政に一番欠如しているのは、民間の持つ、「工期」と「競争」の観念だと思っている。これを徹底すれば、結果は住民の前に鋭く現れるはずだ。私は光町の行政に更に磨きをかけ、役場を「高いサービス配当」のできる優良企業に育てていきたいと考えている。